

# オンライン授業との出会い

高原 明生

夏学期が終わろうとしている。新型コロナウイルスのせいで、勤務先の大学の授業はオンラインで自宅から行った。可哀想なのは一年生だ。せっかく大学に入ったのに、いや入ったはずなのだが、実際には大学の構内に入ることもない。教室での友人との出会いもサークル活動もないのだ。

今学期、私は初年次ゼミナールを担当したので、バーチャルな交流をせいぜい楽しんでもらおうとグループ・ディスカッションを盛んにやらせた。オンライン化の一つの効果か、他の授業でも宿題がたくさん出たようで、中には忙しさに参ってしまった一年生もいたようだ。それでも、私のゼミの新生生たちは熱心に、そして生き生きと中国の

政治外交に関する議論を行った。教えていて手応えもあったし、面白かったという感想も学生から聞いたので、これから提出される小論文に期待している。

大学教員の日々の過ごし方も大きく変化し、夜の研究会など様々な活動が減った。最近では世界各地を繋いだオンライン会議も増え、また忙しくなってきたが、春から自宅にいる時間が増えた。その結果、法学部や公共政策大学院での講義も、例年より手間をかけて準備できた。オンライン授業で教員の顔だけが画面に映っているのでは、学生はうつとういだろう。そこで、講演会の時のようにパワーポイントのスライドをたくさんつくつ

た。また、多くの参考文献をPDFにして授業のウェブサイトにアップロードした。そしてそのサイトに学生から寄せられてくる多数の質問を、毎週、時間をかけて一つずつ回答することもした。

一年生のほか、困難に直面したもう一つのグループは、交換留学やダブル・ディグリーのプログラムで海外に出られない学生、そして日本に來れない留学生たちだ。前にこの欄で紹介したことがあるキャンパス・アジアも大きな影響を受けた。東大公共政策大学院のパートナー是北京大学国際関係学院とソウル国立大学国際学院で、このプログラムに参加した学生は半年ないし一年を二つのパートナー校で過ごすことになっている。オンラインで国境を越えて行われた授業に支障はなかったが、大事な交流活動はできない。東大では例年、三か国の学生を連れて沖縄や広島にフィールドトリップを行ってきたが、今夏は取り止めざるを得なかった。

こういう時に頼りになるのは、普段から何かにつけて協力的なアラムナイ・ネットワークだ。彼らのアイデアに基づき、フィールドトリップの代わりにテーマの似た日中韓の映画を鑑賞して、それらの社会的、文化的背景の類似性や独自性など

につき議論することとした。さて、皆さんならどの映画をお選びになるだろうか。

我々が選んだのは、韓国からはボン・ジュノ監督の『バラサイト 半地下の家族』、中国からは賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督の『罪の手ざわり』、そして日本からは枝裕和監督の『万引き家族』だった。ある韓国人学生は、『バラサイト』がアカデミー賞作品賞などを受賞したのは誇らしいが、韓国社会の問題をあまりにもリアルに見せつけられた感じで、見ていて心地よくなかったと言う。中国人学生は、『罪の手ざわり』はまさに中国の現実を表しているが、『万引き家族』は日本社会でどれほど普遍的な現象なのかと問うた。

私が興味深く感じたのは、『バラサイト』が階級格差を描き、物質的な分配の不平等を主要な問題としているのに対し、『罪の手ざわり』は権力の濫用と暴力を社会矛盾の中心に置き、『万引き家族』は社会の基本単位である家族の絆の希薄化をテーマとしていることだった。

新型コロナウイルスは、それぞれの社会の問題にどのような影響を及ぼすだろうか。オンライン授業を通して学生たちと注視していきたい。

東京大学公共政策大学院教授